
すりリングGIRL？

大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すりリングGIRL？

【Nコード】

N2252C

【作者名】

大和

【あらすじ】

ある日、凄腕のスリ師の主人公の下に一人の依頼人が訪れる。「アナタに依頼したい仕事があります」俺がその依頼を受けた時、俺の世界が一変する事になった。「俺…いや私のショータイムの始まりだ！」私立学園を舞台に女子高生となったスリ師がすりリングな学園生活を巻き起こす。果たして本当に私（俺）は依頼を達成できるのか？

く秘密の依頼く（前書き）

この物語に出てくるスリなどの窃盗及び不法侵入や脅迫・暴行行為等は立派な犯罪ですので、この小説を読んでも決して真似しないで下さい。

〈秘密の依頼〉

ガタンゴトン。

現在時刻は7時、早朝のラッシュで混雑している電車の中で俺は静かに息を潜める。

周囲の人混みに紛れるように意識を気配を同調させる。

別にそう難しい事ではない。俺にとってコレは毎朝の準備体操みたいな物だ。

そして、ここからが本番。今後は意識の一部を自分の指先に集中させる。そして標的を確認する。

完全にこちらへの注意が無くなっているのが分かればOKだ。勝負は一瞬。

電車の揺れに合わせて左手を動かす。

常人には目で追うことも出来ないほどの速度で目標を捕らえて、また元の位置に戻す。その間0・1秒の早業だった。

俺の左手には革製の財布が握られていた。素早く中身を確認する。

別に中身を見る必要は無い。

指先で札数を数える。

(…何だよ。三千円しか入ってねーぞ)

思ったより中身の軽い財布を持ち上げ、先程スリ盗ったサラリーマンの男の肩をトントンと叩いた。

「すみません。財布が落ちましたよ」

と、声を掛けた。

「えっ？」

声を掛けられた男は慌てて自分のポケットを探り始める。当然のように財布は見つからなかった。

「あ、どうも」

男は不思議そうな顔をしながらも財布を受け取った。俺はそのまま次の駅で電車を降りる。

そして人目につかない所まで来ると、自分のポケットの中から幾つもの財布を取り出した。皆さっきの電車の中でスリ盗ったモノだ。どれも中身を確認した時に十分な金額が入っていきそうな手応えがあったヤツだ。

「へへっ！さーて中身はっ」と

この瞬間が実は楽しみなのだ。

「おっ！コイツは二万円入ってやがる。こっちの財布には八千円か……ギリギリだな」

一通り確認すると空になった財布を近くのゴミ箱に放り込む。この際、中身が五千円以下だった財布は抜き取らずそのまま目に付く場所に置いておく。

『五千円以下は盗らない』これが俺が盗むに当たる際のルール。

まあ、盗むのにもモラルって必要な気がするし。

何はともあれ用事が済んだらトットと退散するに越したことはない。駅を離れた俺はねぐらにしているアパートへ戻っていった。かなり老朽化してきた二階建てのオンボロアパート。

この一室に俺の隠れ家がある。なんで隠れ家と言うかはまだ秘密。ギシギシと軋む階段を登り一番奥のドアを開けようとして手が止まる。

（ いるな ）

部屋の中に何者かの気配を感じ身構える。

（警察 じゃないな。誰も尾行して来なかったし、第一気配だけならば中にいるのは一人だけ ）

扉を開けず、扉のすぐ横の壁に背中を密着させる。

（どこぞのヤクザ の訳ないか。何処とも関わってないし）

思考を巡らして見るものの、思い当たらない。

（では 誰だ？）

これ以上考えても無駄であろうと思い直した俺は、警戒しつつ扉を少しだけ開いた。（ つー！ ）

俺はその少しだけ開いた隙間から中を覗き、一瞬で凍り付いた。

「何をそこで固まっているんですか？」

中から男の声が聞こえてくるが、返事よりも先に体が動いていた。一気に扉を開けて中へ駆け込み言い放つ。

「なっお前!？」

部屋には長身の和服姿の男が立っていた。

「そんなに驚く事はないでしょう？用事があつて此処にいるんですよ」

男は意外そうな顔をして答える。

（最悪だ）

この目の前にいる和服姿の男には覚えがある。あるが、はつきり思ひ出すより前に悪寒が走った。

「まあ、立ち話も何ですからどうぞお座りください」

まるで自分の部屋のように振る舞うその姿に俺は、

「ここは俺の部屋だ!!」

と反論したがすぐに無意味だと悟った。

「さて、まずは自己紹介といきましょう」

その図々しさに眉をしかめつつ、俺も近くの椅子に腰を下ろす。

「私の名は雨宮仙十郎 あまみや せんじゅうろう と言います。とある場所で探偵事務所を開いています」

（とある場所ね）

俺は仙十郎と名乗るその男を注意深く観察していった。見るものに威圧感を与えない端正な顔立ちに細めの眼鏡を軽くかけている。

体格はどちらかと言うと広くはない。線が細く華奢な印象を受ける。だが、立ち上る気配は刃物のような鋭さを持っている。

（同業者じゃない が、裏の人間だ）

「アナタに依頼したい仕事があります」

「仕事？」

「はい。凄腕のスリ師の草津晶 くさつ あきら アナタの腕を見こんでの依頼です」

「買いかぶりだな。それに説明臭い紹介をありがとう」

「いえいえ」

イヤミで言っても軽く流されてしまった。

「それにしても、よくこの場所が判ったな」

「苦労しましたよ。こうも隠れ家が多いと、捜すにしても並大抵の物ではない」

「お褒めに預かり光栄だな」

（そりゃ当然だな）

俺はそうは思ってもやはりこの男、ただ者ではない。コイツの言うとおり俺の拠点とも言えるアジトは一つや二つじゃあ済まない。

どう見積もっても軽く三桁は超える。しかも《捜して》いるとなれば、必ず俺の耳に入るようなネットワークもちゃんと作ってある。

だが、現実にはそれよりも速く奴はココにいる。

（この速さ 間違はなくピンポイントで来やがった）

恐るべき情報網だ。

「で？その依頼ってのは何なんだい」

この手の人間は深く詮索すると後で火を見る事になる。

「お聞かせする前にお請けするか否かを伺いたい」

もつともな話だ。

「内容による。ヤバさとはかく殺し関連はお断りだ」

俺の所に来る依頼の中には何を勘違いしたのか、時たま殺人依頼などが紛れ込んでくる。まあ、その辺は俺のもう一つの顔に関係しているのだが。

「ご心配なく。ただの調査依頼です」

「はあ？」

何を言ってるのか理解出来ずそのまま聞き返した。

「ちよつと待った。だとしたら相手間違えてないか？俺は探偵みたいな調べ事なんかしないぞ？」

「そうです。普通ならね」

「つーことは、普通じゃない調べ事な訳だ」

「お請け出来ますか？」

普通じゃない調べ事。逆を言えば犯罪紛いでなら可能なことも言える。

「いいだろう。その依頼確かに引き受けた」

俺はこの依頼を引き受けた事を非常に後悔する事になるうとは考えてもいなかった。

（まあ、久方ぶりに本業に手をだしてもいいだろう）

本業。これに関しては直に判る事だからあえて説明はしない。

「アナタなら引き受けてと思ってました。ではさっそくですが内容をご説明致します」

そう言つとドアからノックの音が聞こえてきた。

「今日は客が多いな」

そう呟くとドアからまた男が入ってきた。

「失礼します。雨宮先生はいらっしゃいますでー あー、いただいた。見つけましたよ。全く、勝手に事務所ほっぽらかして出掛けちゃうんですから。依頼の件どうするんですか？」

男は仙十郎に歩み寄ると次々と文句を言ってきた。

「マシンガンみたいな奴だな」

俺は少々感心しながら見てると、やっとこちらに気付いたのか自己紹介をしてきた。

「ああ、失礼しました。俺は朝霧天馬 あさぎり てんま と言います。雨宮探偵事務所です。で、アナタは？」

「今回の依頼でサポートをお願いした方ですよ」

「ええっ！？て、事はですよ。俺はまた潜入を？しかも彼と組んでですか？」

「もちろん。その通りです」

「うわぁ またかよ」

勝手に上がってきて、勝手に自己紹介してきてその上俺は蚊帳の外扱い。

（何なんだこの朝霧とか言う奴は？）

話に全く入り込めない上に、どんどん進んでいく会話。そのまま

はラチがあかないので俺は口を挟んだ。

「おい、そろそろ依頼内容を教えろ」

「ああ、すみませんでした。ではお話します」

やっと元の方へ話が戻ってきた。

「半月ほど前にあったある女学園の事件はご存知で？」

「女学園？　そう言えばあったな」

俺は記憶を辿りつつ思い出していく。

「確か、学園の生徒達が拉致されて警察と犯人達との激しい銃撃戦が行われた。拉致された女子生徒は別働隊が無事に救助して犯人達は一人残らず逮捕された。まあ、後日学園側関係者は散々にマスコミに叩かれたみたいだな。管理責任がどうの安全性がどうなの……」

「まあ、その辺が表向きの顛末ですかね」

「だろうな」

そこまでは世間一般が知っている内容だが、この事件は裏側の人間達には相当話題になった。

『バカな連中が　鬼　を叩き起こした』と。

そこまで思い返していくと、この仙十郎と言う男の正体が判った。

「……ん？　ちよつと待て。お前まさか……」

仙十郎は黙って頷く。

「なるほど、あの事件にはあんたも絡んでいたわけか」

「その通りです。ちなみに、事件の当事者はその朝霧君だったりします」

「なっ　！　巻き込んだのは所長じゃないですか……！」

「アナタがドジ踏まなければこうはならなかったのでは？」

「うっ」

また始まった。

「まあ、その件は後々説明するとして。実はあの事件には別の顔が存在していたんです」

「別の顔？」

「この事件の犯人達は何が目的だったと思います？」

「身代金目当てじゃあ無いんだろ。ん？待てよ、そう言えばあの事件の前後で大規模の裏取引があったな。内容は確か麻薬 スパイ ス の受け渡しだったはず」

「その取引にはもう一つ商品があったんですよ」

仙十郎は意味あり気に笑って見せる。

（麻薬以外 まさかー）

「拉致してきた女子生徒を人身売買の商品にしたんですよ」

朝霧は吐き捨てるように言葉を続けた。

「で？今回の依頼にその事件のどこが関係しているだ？」

この国での人身売買は基本的にタブーだ。だが、時折それを平気でやる連中がいる。まあ、その内の大半は先の事件のようにヒドい目にあう事になる。

だから、その女子生徒にしる取引先の相手にしろ、俺には何も関係ない。

「これが関係大あります。実は、あの事件の首謀者はまだ捕まってるんですよ。ドサクサで逃げられてしまってます。で、あのバカまた性懲りもなく別の学園で何か企てています。流石に野放しにもできないので奴の陰謀を暴き防いで欲しいんです」

「おい。確かに俺は殺し関連はやらないが、だからと言って正義の味方なんか御免だぞ」

引きつる口を抑えながらなんとか応えると、仙十郎は後ろ頭を掻きながら訂正した。

「まあ、厳密に言えば計画を潰しながら奴を捕らえて貰えば良いんです。そうすれば、ちゃんと他の皆さん方が処分してくれますから」

「なる程」

確かにこちらで処理しなくても、ルールを破った奴に制裁したい輩は大勢いる訳だから。

「それで？そのバカは何者なんだ」

「黒龍会の元締めをしている惨利火李　ざんり　かり　という男です」

「なんか、スルメを垂らせば釣れそうな名前だな」

「一応ツツコミを入れておけば、それはザリガニです」

「に、しても黒龍会？聞かないな。新参者かい？」

「こういう仕事をしていると、そっちの方面の情報も自然と入ってくる。が、この黒龍会と言う組織はあまり聞くことは無かった。

「紫竜会はご存知で？」

「紫竜会？知ってるも何も、この業界で知らなきゃモグリだぞ」

《紫竜会》。

総大将　いや、数々の企業を抱えているから総帥の神楽総司。若くしてこの国の裏社会の殆どを管理している裏業界のNo.1の実力者。

その彼が組織している団体が《紫竜会》だ。

内情は詳しくは分からないが、全国各地に広がる膨大なネットワークに、世界中の闇市場を牛耳る《メサイア》と呼ばれる組織にもパイプを持っているらしい。

絶対に敵に回したくない奴らだ。

「惨利は元は紫竜会の人間でしたが、組織を裏切り黒龍会と名乗り今に至っている訳です」

「　大した奴だな。と、言う事はこの事は紫竜会は知っているんだな？」

「はい。裏切りと言っても実質的な被害は無かったそうなんです、今回の一件で野放しには出来ないと言う事になりました」

「前言撤回。やっぱりバカだわ、そいつ」

「と、まあ依頼内容はそんな感じです。一応、紫竜会もバックアップはするそうですのでよろしくお願いします」

紫竜会のバックアップとは随分と心強い条件である。

惨利に少し同情してしまった。

「しかし学園か…。潜り込むにしても色々面倒だな」

「その辺ならご心配なく。そろそろ戻ってくる頃ですの」

「戻ってくる？」

辺りを見渡すと朝霧の姿が消えている事に気付いた。

「いつの間に…」

（仙十郎もそうだが、あの男も侮れないな…）

部屋を出ていく動作に全く気付かなかった事に俺自身が驚いた。少しして朝霧が戻ってきた。

「遅くなりました」

息を切らせながら入って来たわりに汗一つ出ていない。

「いや、良いタイミングでしたよ。で、首尾の程はどうでしたか？」

「バッチリです」

そう言う手を持っていた袋をこちらに渡してきた。中を見るとリングが一つだけ入っていた。

「これは？」

持ってみるが、大きさはブレスレットみたいな小さなリングで目立った装飾はなく、赤い石みたいなものがはめ込んであるだけだった。見たところルビーのような宝石では無くイミテーションの偽物らしかった。

それ以外を調べても細工らしい細工は無い。

「通信機でも内蔵しているのか？」

それが無くても盗聴器だの発信機だのが仕込まれていると思ったのだが、どこをどう見ても普通のリングだ。

「どうぞ着けて見てください」

促されるままに、とりあえず左腕に着けてみた。

カチツとリングがハマる音が響くが、それ以外は何も無かった。

「それで、このリングは何なんだ？まさか、透明人間にでもなれるとか？」

「直ぐに分かりますよ。すぐにね」

朝霧の顔を覗いてみるが何やら複雑そうな顔をしている。

「　　！！？」

異変はすぐにやって来た。

「か　体が、熱い　　！お　おい！？　一体が起きてんだ　　！？」
全身が燃えるように熱くなり、意識が遠のいて行くような錯覚に襲われる。

無論、体の感覚はちゃんと感じられて思考もしっかりしている訳だから気を失ったのではない。

しかし意識だけは、宙を舞っているような感じがしていて不思議な気分を味わった。

次第にあの燃えるような熱さも退いてきた。

「くっ、ハアハア　。どうなってるんだよ…ん？」

やっと体が落ち着きを取り戻し呼吸を整えていると、妙な違和感を感じた。

（　今の声は誰だ？）

確かに今のは自分自身が発した言葉だが、妙に高く聴こえる。

「あー」

もう一度声を出してみたが、やっぱり気のせいではなかった。

「何で声が変わったんだ？」

「変わったのは、声だけではありませんよ」

そう言った仙十郎は手鏡を差し出してきた。俺は鏡を覗き込み硬直した。

「誰だコレは？」

三十秒後、やっと搾り出した言葉がコレだった。

鏡に写っているのは見たところ16・7歳の少女で、長年見慣れてきた自分の顔では無かった。

「誰だって、ご自身の顔ですよ？」

普通に返してきた仙十郎に対して朝霧は何故か顔を逸らしている。

「朝霧君、ご説明をしてあげなさい」

どうやらこっちは色々と知っていそうだ。第一、このリングを持ってきた張本人だ。

コイツの正体を知っていると見ていいだろう。

「どういう事がちゃんと説明してくれ」

俺は朝霧に問い詰めた。

「わかりました。ご説明いたします。このリングは一種のオーバーツのような物でして、装着者の性別を反転させる力を持っています」説明を受けたは良いが、いきなりオカルト話になってきた。

「性別反転？それにオーバーツだと？」

正直、この手の話は苦手だ。こんなのを信じようならこの業界をやってられない。

「まあ、普通なら信じられない話ですが事実ですから」

確かに実際問題、俺自身が女に変わっている訳なのだから本物と見ていいだろう。だが問題は、元の姿に戻るかどうかという事だ。

仕事の間は何であれ我慢しよう。だが、終わった後もこのままでは日常生活はともかく、仕事に色々差し支えかねない。

「一応聞くが、元の姿に戻る方法はあるんだろうな」

「それなら、リングを外せば五分で元に戻れますよ」

大層な能力の割に随分簡単に戻るな。と言いたかったが、現実には甘く無かった。

「ただし、満月の晩だけです」

「…オオカミ男かよ。と言うことは、最低でも1ヶ月近くこのままの姿なのか!？」

「はい」

あっさり言い切った。

「さて、朝霧君。説明は終わりましたか？」

さっきから黙っていた仙十郎が待っていたかのように口を開いた。

「はい。後は後々、御自身が気付くはずですから」

まだ何かあるのか…。

「それでは、私は色々準備がありますのでこれにて失礼いたします。こちらに資料を置いておきますのでご覧下さい」

言うや否や席を立つと封筒に入った資料を置いて出て行くこうとして、

扉の前で振り向いた。

「そうそう、明日から行動開始するので準備を怠りなく」

「OK。分かったよ」

俺は了解して資料に目を向けた。戸が閉まると俺は一息ついた。

（まるで嵐のような連中だったな）

壁に掛かった時計を見るとまだ二十分しか経っていない。ともかく資料に目を通してサッサと準備をしなければならない。

「どれどれ…」

資料の内容は以下の通りである。

【 主要目的 私立鈴桜学園に潜伏していると思われる惨利火李を発見し、目論みを阻止する事。

その際、当人の確保を厳守とする。

学園には以下のサポート要員が在籍しているので、必要に応じて活用して欲しい。

メンバーの一覧はこの通り……………。

尚、有事の際は紫竜会からの指示もあり得るので従う事。

学園説明 —……………。】

あとは、学園の生徒数だの見取り図だの行事なんかの情報が記載されている。問題は最後の一文である。

「えーっと、

【尚、惨利火李には特定の武力組織がバックに存在している可能性があり、行動の際は注意されたし】

…おいおい、随分と物騒なオプシヨンが付いているな」

とりあえず、この仕事で退屈するような事は無いと理解できた。

「しかし、鈴桜学園か。あそこは確か輝宝 きほう 学園と兄妹校だったな。まてよ、輝宝学園は確か紫竜会が運営していたよなる程な 向こうからすれば、絶好の狩り場に入り込んでくれた訳だ」

これなら紫竜会がバックアップしてくる理由が分かる。

「問題は、直接俺が生徒として潜り込むことだが…」

俺はもう一度自分の体を眺めてみた。

16・7才と言う年相応な細いスリリとした手足に、年相応ではない胸の豊かな膨らみ。形の良いくびれたウエストに鏡を見ると絵に描いたような美少女の顔が写る。

別に過剰評価している訳ではなく、世間一般的に観ての評価だ。

自分で言うのも何だけど。

一番気になるのは、さっきから重く感じるこの胸だ。

計った訳ではないが、多分86・7ぐらいはあるんじゃないだろうか？背も幾分か低くなっているので、十分女子高生として通用する。ついでに黒の短髪だった髪も伸びて、背中にかかるまでになっていた。軽く持ち上げてみると、しっとりしていて艶がある。

「…しかし、コレじゃまるでどこかのマンガかアニメだな」

よく考えてみれば、これだけのスタイルを持つ女子高生もそうはいないだろう。

「なんか入って早々に目立ちそうだな…」

出来れば目立たないようにしたい所なのだが…、無理な相談のようである。

「さてつと、考えて無いで動くか」

俺は立ち上がると座っていたソファをひっくり返した。更にその下の床を探ると、目立たないが折り込み式の取っ手があった。

それを引っ張るとロックの外れる音がして、床に仕込まれていた扉が開く。

中には梯子が下に伸びていて、一階を通り越して地下に続いているようだ。

「ふふふ…この扉を開けるのは久しぶりだな」

建物同様に古く錆びた梯子を慎重に降りていき

ボキッ！と

良い音を立てて梯子が折れた。

「…っな！？うわああ！！！」

そのまま地下室まで直行便になった。

「イタタタ…ちゃんと整備するのすっかり忘れてた」

打った腰をさすりながら立ち上がると、寿命を全うしたらしい梯子を見上げた。

「尻がデカくて助かったかな？」

我ながら何ともデリカシーの無いセリフである。

「さて、どれを持っていくかな？」

周りを見渡すと大小様々な器具が所狭しと並んでいた。

ワイヤーガンにピッキングツール、煙玉や特殊ナイフ等々…。

日常生活は愚か一般でもまず見ることは無い器具である。

「コレとコレと…あ、コイツは直さないで。で、コレも持っていてと」

次々と道具を用意したアタッシュケースに積めていき、最後に黒光りする物体を掴んだ。

「コイツは出来れば使いたくないな…」

【93R1st改】

30連装式のハンドガンで、フルオートで発射可能な俺の愛銃だ。自分好みに改造してレーザーサイトや装弾数を増やしてある。

それとも一つ。

グレイヴ・バスター

【G&B】

こっちは自作した銃で6連装式のリボルバータイプのハンドガンだ。破壊力を重視した設計で、弾丸次第ではトラックどころか装甲車を貫ける威力を持っている。

「資料の最後の一文が気になるから…。まあ、杞憂で済めばいいが一応持っていくか」

銃のチェックをして弾薬を込める。暫くして道具を積み終わると、入ってきた入り口とは別の出口へ向かっていった。

なにせ戻るための梯子がそこで事切れているからだ。

とりあえず軽く合掌してから奥の階段を降りていった。

階段の先は下水道に繋がっていたが、途中の隠し通路から外に出た。各要所に色々な通路を設ける事であらゆる場所に出れるよう造って

あるのだ。

「よいしょっと。ふー、やっと出られた」

アパートから幾分か離れた所の隠し扉から顔を出した俺は、左右を確認しながらそろそろと外にでた。辺りを見るとアパートの裏手にある小さな公園らしかった。

「ありやゝこんな所に出たか。…ん？」

見ると遠目ではあるが人影が見える。数は四人。

内三人は男で後の一人は女らしかった。

公園に人がいるのは別に不思議ではないが時間がおかしい。

公園の時計を見ると午後の10時を回っている。こんな小さな公園でこの時間に人影が見えるのは少々不自然だ。

「ーなして下さい！」

どうやら男共から熱烈なナンパを受けているらしい。

「アイツらはこの辺りに巣くつてる悪ガキ共だな。…で？女の方は

ー！あれは鈴桜の制服じゃないか！」

構われている女の着ていた服は資料にもあった鈴桜学園の制服に間違いなかった。

「学園関係者じゃあほっとく訳にもいかないか」

とは言うものの今の俺は女の体で、まともなぶつかれば勝ち目は薄い。

最悪ミイラ取り状態になりかねない。

「…仕方ない。あの手でいくか」

俺は諦め半分の気持ちで四人の下へ向かっていった。

「いい加減にして下さい！」

「いいじゃねえか。チョットさーオレらと楽しい事しよーぜ」

「そうそう。ヤツクの言うとおり遊ぼーよ」

さつきから必死に掴んでくる手をかわしながら逃げてくる内に、いつの間にか人気のない公園に追い込まれてしまった。

近くにアパートのような建物が見えるがどこの窓も灯りが付いておらず、大声を出しても助けは来そうもなかった。

（どうしよう…）

このままこの男達に捕まれば絶対に口クな目に会わない。

どんな目かは判らないが直感でわかる。

絶対に捕まる訳にはいかない。

（だれか…）

その時、男の一人に左手を強く掴まれた。

「へへつつつかまえたー！」

「いや！放して下さい！」

「大人しくしやがれ！」

思いつきり引つ張られ体が前に傾く。

「きゃ！」

だが、完全に地面に倒れる事は無かった。

「え？」

見ると自分の体は誰かに支えられている。顔を上げて見ると一人の女性の姿が目に見えた。

（女の人？）

その女性は背を向けたまま自分を庇うように男達の前に立ちふさがった。

「大丈夫かい？」

その女性は優しく問いかけてきた。とても透き通っていて胸の奥がほっとく暖かくなるような優しい声だった。

「…はい」

その後ろ姿はまるで天使が舞い降りてきたような神々しさと、慈愛に満ちた女神が守ってくれている安心感に満ちていた。

（　　危なかった）

俺は心の中で安堵の息を吐いた。

（よく考えたら見ている場合じゃ無かったよな。間に合って良かった…）

とりあえず警戒心を持たれないよう優しく声をかける。

「大丈夫かい？」

「…はい」

背中越しに聞こえてきた返事を聴く限りじゃあケガは無いようだ。

（さて、まずはコイツ等を始末するか）

今日の前にいるのは三人。

内一人は俺が左手で捻り上げている。

彼女を掴んでいた手を素早く掴み、柔術の要領で捻り返す。関節の構造を知っていれば女の力でも可能な技だ。

無論、完全に決まっているからどう足掻こうと外れはしない。

「よつと」

ゴキッ！今度は更に力を加えて本当に関節を外す。破壊しても良いのだが、あまり大きな問題は起こしたくない。

「ぐあああつ！」

あまりの痛さに転げ回る男を踏みつけて残りの二人に向き直る。

「まずは一人。次は誰だい？」

「う……」

さすがに相手の力量を悟ったのか足が後ろに下がる。

「このまま病院送りにされなくなかったら、この生ゴミもってサッサと帰りな！」

睨みながら怒鳴りつけてみる。

これで素直に逃げ帰れば良いんだが、下手にプライドを持っているようなら……。

「ひいひい！」

一人はさっきの男を連れて逃げ出したが残りの一人が逆上して殴りかかってきた。

「このアマ！ふざけやがって！！」

「やれやれ……」

このまま避けてやっても良いのだが、後ろの彼女に当たる恐れがある。

仕方がないので半歩だけ横にずれて受け流すと、一気に懷に滑り込んで顎に掌底を叩き込む。

「ぐっ……」

倒れ込む動作に合わせて踵落としをお見舞いする。

「……！！」

うめき声も出せずに気絶した。

「ふーこれで片付いたかな？」

周りを見渡してみるが、どうやら仲間と呼ばなかったらしい。

さっきから後ろが静かだったのが気になり振り向いて確認してみた。

「怪我は無かった？」

「……あつ。はい！大丈夫です！」

答えは直ぐに返ってきた。この様子じゃ大丈夫だろう。

ただ顔が少し赤くなっていたのが気になったが、大したことは無い

だろう。

あれだけの騒ぎだ、多少興奮してても不思議じゃない。

「じゃあね。帰り道に気を付けるんだよ」

取りあえずそれだけ言い残して足早に去っていった。

(…すごい)

私は目の前の光景に目を奪われていた。

(あの男の人達を軽々と一蹴していくなんて…)

最初に捕まえていた人を簡単に倒してしまった事にも驚いたが、響き渡るソプラノの声が私をもっと驚かせた。

「このまま病院送りにされなくなったら、この生ゴミもってサッサと帰りな！」

凜として、力強さを感じさせるその声に私は聴き入ってしまった。

(綺麗な声…)

残りの人達も今の声に気圧されたように後ずさっていく。

残っている内の一人は倒れている仲間を抱えながら走り去って行っただけ、もう一人の方は女性に殴りかかってきた。

(…!あぶな…)

その時、すっと体を横にズレたかと思うと相手の男が倒れ込んだ。た。

(え!)

それに合わせて女の人も右足を高く振り上げた。

（綺麗…）

動くたびに舞う黒髪が公園のライトで煌めくように照らされる。

（踊っているみたい…）

そして振り降ろされる踵を食らって完全にKOされた男が地面に叩きつけられる。

そんな光景を観ていたら、不思議と胸の鼓動が高まっていくのが感じられた。

（なんでだろ…。この人を見ているとドキドキしてくる…）

しばらく呆けていたらいきなり声がかかってきた。

「怪我は無かった？」

気が付くと目の前に助けてくれた女性が立っていた。

「…あつ。はい！大丈夫です！」

慌てて応えたと彼女は満足げに微笑んだ。

「じゃあね。帰り道に気を付けるんだよ」

そう言っただけで夜道の中を一人立ち去っていった。

「あ…あの！行っちゃった…」

（カッコ良かったな…）

私は彼女が去っていった後、肝心な事に気付いた。

「あつ！名前を聞くの忘れてた」

しかし、肝心の彼女は既に闇の向こうに消えてしまっていた。

「また会えるかな？」

逃げてきた方向に向き直り帰路につくが、何となく予感がしたのだ。

「うん。きっと会える！絶対会える！」

そう思うと気持ちが軽くなっていく気がしてきた。

「あー疲れた」

疲れたとは言っても肉体的には無く、主に精神面で疲れたのだ。

「全く、なんで鈴桜の生徒があんな所にいるんだよ…。一応助けておいたが、暗かったし顔を見られた訳じゃ無いだろうし…たぶん」だが、彼女が鈴桜の生徒ならば否が応でも明日出会う事になる。

「そう言えば名前を決めとかないとな。まさかそのまま名乗る訳にもいかないし」

明日は学園へ生徒として潜り込むのだ。別の名前の方が色々と都合なのは間違いない。

「さて、何にするかな？　ん？」

いきなり体に落ちてきた水滴を見て空を見上げた。見上げた夜空は星が見えるくらいの晴天なのに小雨が降ってきた。

「…通り雨か　これだ！」

降ってきた雨を見てこれから名乗る偽名が思いついた。

「しぐれ…時雨未央【しぐれ　みお】。これが俺　いや私の新しい名前だ！」

俺　いや私はもう一度空を見上げて呟いた。

「さて、これからが俺　じゃ無い。私のショータイムだ！面白くなってきたぜ」

だが、ここで一つ重大な問題が出て来た。

「その前に言葉遣いを直さなきゃな…」

ポリポリと後ろ頭を掻きながら私は自分のボロアパートに帰って行った。

（気を引き締めて行かないと…）

私はそんな事を考えながら眠りに落ちていった。
明日が本番…、波乱の学生生活の幕開けである。

偽りの転入生

私は目の前の巨大な校門を見上げて呟いた。

「噂には聞いていたが、これほど豪華とは思わなかったな」

門の至る所に桜模様のレリーフが描かれていて、門の中央にはでかでかと鈴のマークが彫られている。

だが余りにも大きいので、最初に見たときは鈴と言うより寺なんかに置いてある鐘かと思っただくらいだ。

「時雨さん、一瞬釣鐘かと考えたでしょ？」

自分の後ろから声が聴こえてきた。

振り返るとそこにはショートカットの自分より少し背の低い女の子が立っていた。

淡いピンク色のセーラー服を着ていたが、この服装は見覚えがある。と言うか今自分も同じのを着ている。

胸元のリボンに小さい鈴を模したブローチが付けられて結構可愛いデザインになっている。

「よく似合ってますよ時雨さん」

「…ありがとう。朝霧君？」

「違いますよ、今の名は宮倉志保みやぐらしほです。気を付けて下さい」

「わかったよ宮倉さん」

「志保で結構です」

一応説明しておこう。

この目の前にいる女の子が昨日俺に不可解なリングを渡した朝霧天馬という男だ。

いや元男だった。

どうやらあの後、天馬自身も同じリングを身に着けて変わったらしい。

まあ本人は嫌がったらしいが相手が自分の上司じゃ分が悪かったよ
うだ。

私は自分の左手を上げてそこに付いているリングをみた。

「まさかこのリングにあんなオプシヨンが付いていたとはね」

昨日の夜、あの公園での一件の後に気が付いた事だけど、自分の体がまるで羽根のように軽いのだ。

それだけじゃなく運動反射能力、よく言う所の反射神経が格段に向上しているのだ。

オマケに力も若干強くなっているような気がする。

体表面には筋肉として出てはいないが、コレには流石に驚いた。この状態なら女の体でも例の武力組織にもまともに闘り合える自信がある。

唯一不満があるとすれば、このデカイ胸が動くたびに揺れて邪魔でしようがない事くらいか。

…我ながら随分と贅沢な悩みのような気がする。

「それにしても、昨日の今日で随分と手際良い事じゃないか？」

「何の事ですか？」

志保が不思議そうに答えたが、すぐに察したようだ。

「あ！転入手続きやそのほか諸々の事ですか？」「そうだよ。これじゃまるで、最初っからこうなる事が分かっていたかのような周到さだぞ」

「でしようね」

「でしようね…て、お前な…」

私は今朝の出来事を思い返してみた。

コンコン。

朝早くに俺…私の部屋のドアをノックする音が響いてきた。

「来たか」

私はドアに向かって歩こうとしたが、その前に仙十郎が入り込んできた。

手には随分と大きな紙袋をぶら下げていた。

「おはようございます。早速ですけど草津さん、準備の方は出来ますか？」

「ん…まあね」

そう言つて昨日用意したアタッシユケースを見せた。

「使いそうな道具は一通り入ってる。流石に制服とかは用意出来なんだがな」

「十分です。後の方はこちらで済ませておきました」

そう言つと持っていた紙袋を床に置いた。

ドサツと音を立てる所からえらく大量の荷物が入っているようだ。

「…その中身はなんだ？全部制服な訳は無いんだろう？」

「まさか。まあ見て下さい」

言われて中を覗き込んだら、案の定ギツシリと衣服が詰め込まれていた。

「一応サイズは合っている筈です。制服を始め、その他の洋服なども入っています」

中を確認してみると妙な衣類が見つかった。

えらく小さな布きれにホックなんかが付いている胸当てもといー。

「！！こりゃ女物の下着じゃないか！」

他の衣類に紛れて色とりどりの下着が入っていた。

「必要でしょ？」

「そりゃあ確かに必要だが」

一体こんなモノをどうやって手に入れたのか非常に気になるが…。
まさか直接買いに行つたなんて事は無いだろう。と、言つか本当だつたらすごく怖い事になる。

「あ、誤解しないように。コレを用意したのは朝霧君ですから」

「そうか。ん？ちよつと待て確かアイツも男だったよな？なんでこんなに用意出来たんだよ」

「その辺なら直接本人に聞けば早いですよ？」確かにその方が早い
が、コイツ自身は既に事の真相を知っているに違いない。

とは言つても今必要なのはコレの追求では無い。

「まあそれは良いとして、昨日渡された資料を見る限り私が転校生の生徒として学園に入り込んで惨利を捕獲する。と、まあコレぐらいで良いんだろうけど、いきなり転校生がやって来るなんて向こうさん警戒しないか？」

時期から言ってもう梅雨明けで、夏に突入するようなこの時に転入生とはちよつと変なん感じがする。

「その辺は大丈夫です。前もって手を打っておきましたから」

「… あっそう」

どんなテを仕掛けたんだろうと気になったが、これも気にしない事にしよう。

「では早速着替えてもらって行きましょう。学園側にはもう話をつけてありますから」

「へ？今日から登校するのか？」

「はい、そうです」

確かに今日から行動を起こすとは言っていたからおかしくは無いだろう。

「わかった。じゃあ着替えるよ　で、なんでカメラをそんな所に仕掛けてあるんだ？」

よく見ると襟元に小型カメラのレンズが光っているのが見えた。

「え？ああ　これは…その　ちよつとした思い出の一枚にどうかなーと…」

「いらんわ！つーかサッサと外せ！んなもん」

仙十郎は渋々カメラを外した。

「他に無いだらな？」

辺りを注意深く見渡す。

カメラの類はレンズそのものを隠す事は不可能に近い。

なぜならレンズを物で覆ってしまえば写す事が出来なくなる。

従って、今自分から見える位置を重点的に探せば見つける事ができる。

「無いな…うん、大丈夫か」

他にカメラが無いことを確認すると、私は上着を脱ぎ始めた。たゆんと胸が大きく揺れる。

取りあえず適当なブラを掴んでつけてみる。紙袋の中にやり方が書いてあるメモがあったのでそれを参考に身に着けていく。

「よ…と、なかなか難しいな―」

と、ここで後ろから視線を感じた。

「仙十郎さん？何をシテルンデス力？」

つつい声が裏返ってしまった。

後ろを見ると今度はビデオカメラを片手に仙十郎が立っていた。

「あ、お構いなく。続けて続けて」

笑顔で促す仙十郎の首根っこを掴むとそのまま外へ放り投げた。

「外に行つてろ！このスケベー！！」開いていた窓から仙十郎は飛び立つてもとい、放り出されていった。

「若いつていいな―！！」

そう叫びながら景気のいい音を立てて落ちていった。

「たつく…図々しいにも程があるぞ」

私は窓を閉めるとすっかりカーテンも閉めて着替えの続きをした。

「…確かに、最初っから全部分かって動いていたな」

いくら何でも出来過ぎな気もするが、ここまで来たら気にしないで行こう。

気にしたら負けだ。

色んな意味で。「そろそろ行きましょうか。えーと…」

「私の今の名は時雨未央しぐれみお未央で良いよ」

「じゃあ未央さん、早く学園長室に行きましょう」

「そうだな。何時までも突っ立ってても仕方がないし」

私達は早速校舎へ向かって歩いていった。

校舎の見取り図は既に記憶してあるので迷うことなく目的地に辿り着いた。

学園長室の扉を数回ノックするとすぐに返事が返ってくる。

「失礼します」

私は扉を開けようとしたら志保が軽く制止して小声で語りかけてきた。

「中に入ったら私に任せて下さい」

「ー？分かった」

中に入ると正面に大きな衝立…では無く大きな屏風が立てられている。

桜の木に天女が舞い降りる光景を表している煌びやかで、見事な絵だった。

「あれ？この屏風はどこかで…」

「どうかしましたか？」

「あ、いや別に何でもない」

（まさかな…）

どこかで見覚えがあつたのだが、思い出せなかった。

奥に入っていくと初老の男が窓の外を見ていた。

部屋には彼しか居らず、この人物が学園長なのだろう。

「お初にお目にかかります。私達は本日この学園に転入して来た時雨未央と…」

「宮倉志保です。宜しく願います」

とりあえず学園長に簡単な挨拶を済ますと、志保が何かの封筒を手渡した。

学園長がそれを受け取ると目つきが一瞬だが鋭くなった。

よく見ると封筒に何か印が付けられている。

「その印はー！」

付けられていたその印は紫色の竜の印、即ち紫竜会からの封書だったのだ。

学園長はそれを読むとこちらに対して頭を下げてきたのだ。

これにはこちらも驚いた。

「お、おいおい…」

「有難うございます。あなた方が紫竜会からの密偵だと言うことは既に知っておりましたが、まさかこの様なご高名のある方達に来て下さるとは感激の至りで御座います」

「ご高名…て、そんなに有名だったか俺…？」

「私も有名だったかどうか…」

「違うのですか？」

「あ、いや紫竜会からの密偵という部分は合っているんですけど…。そのご高名ってのがちょっと」

「すまんけど、ちょっと借りるぞ」

私は学園長の手から手紙をすり盗ると中身を覗き込んだ。

「なんて書いてあったんですか？」

志保も覗き込む。

「コイツは…」

「あれま」

二人同時に呟いた。

手紙にはこう書いてあった。

【拝啓、親愛なる鈴守学園長殿。故たびの件につきましてはご協力の程を了承していただき、誠に感謝しております。

それにつきまして、こちらから二名の実力者を派遣致します。

一人は朝霧天馬という探偵で情報収集や推理力に優れ、前回の事件を解決に導いた大変有能な探偵です】

「ほほう？」

あの事件の当事者とは聞いていたが、それが解決させた張本人だとは思わなかった。

どうりで昨日その話を話していた時に顔色が優れなかった訳だ。【そしてもう一人は草津晶という一流の盗賊です】

「盗賊ですか?!」

「一応言つとくが 元 だからな！」

何でこんな事を知っているのか分からないが、流石は紫竜会ネットワークだ。

…うむ、侮れんな。

【彼は現在スリ師として活動していますが、その高い能力は未だ健在です。

調査中は当然の事ながら、非常時には絶大な功績を挙げて下さる事でしょう。

この二人を中心して我々はこの件を片付けたいと思っております。

鈴守殿も彼らのサポートを宜しくお願い致します。

紫竜会頭目：神楽総司】

「」

「…はあ」

二人のため息が重なる。

「こりゃ何ともありがたいお言葉だな…」

「そうですね。ここまで期待されているとなると、確実に成功させないといけませんね」

「当たり前前の事を言うな。元より失敗する気はない。お前もそのつもりだろ？」

「そうですね。その通りです」「と、言う事だ。これから宜しく頼むよ鈴守学園長」

私達は学園長に向き直り改めて挨拶した。

「こちらこそ宜しくお願い致します」

挨拶兼紹介が済んだ所で早速本題に入る事にした。

「さて、それでは私達は基本的に学生として行動しますので、あまり目立つた動きは慎んだ方が良いでしょうね」

「そうだな。…ん？」

入って来た扉へ誰かが近づく気配を感じた。
暫くしてノックの音が聞こえてくる。

「失礼します」

入って来たのは若い女性だった。

服装から見て教師だろう。

後ろ髪を青いリボンで束ねて細めのメガネを掛けているが、目が優

しく見えるせいかさほど厳しくは見えない。

「あの、今日転入して来た生徒達がこちらにいらつしゃると聞いたのですが…」

「篠原先生、こちらが今日から貴女が受け持つ新しい生徒達です」
学園長がこちらを指して紹介してきた。

「初めまして。時雨未央です」

「宮倉志保です。宜しくお願い致します」

「こちらこそ宜しくね。私の名前は篠原宮子。しのはらみやこ あなた達のクラスの

担任をしているの」

担任と聞いて少し驚いた。

志保…いや朝霧の実年齢は判らないが、この目の前にいる女性はどう見ても二十代前半にしか見えない。

と、すればまさか…。

「二人共。彼女は今年の春に教師になったばかりの新任さんだ。色々不都合があるだろうが頑張ってくれたまえ」

「学園長」「半分泣きそうな目をして学園長を睨むが、当の本人は目を逸らして惚けた。

しかし、そんな二人のやり取りに構わず私達は何とも言い難い気持ちになっていった。

「…未央さん、ひょっとして彼女は私達よりも…」

「ああ、間違いなく年下だな。志保 いや朝霧お前、歳いくつだ？」

「23…いや4だったかな？」

「俺は27だ。普通に考えれば多分彼女の方は21歳かそこらだろう？」

「若いですね…」

「確かに若いな…」

二人でコソコソと話していると篠原が…いや、一応担任だから篠原先生が訪ねてきた。

「どうしたの？二人で話し込んで」

「あ…いや別に何も」

咄嗟にはぐらかそうとしたが、学園長が言った一言で二人は凍りついた。

「そうそう、確か今年で二十歳になったそうだから君たちの歳とそう変わらんぞ」

『ハタチ！？』

見事なまでに二人の声がハモった。

「マジかよ…」

事実は小説よりも奇なり　　と言うことわざがある。

私…いや俺達からしてみれば同年代どころか、年下の妹みたいな存在である。

しかし、向こうからすれば私達はごく普通の女子高生な訳だから何とも微妙な立場になるわけだ。

「志保…。こりゃ相当気を配らないといけなそうだな」

「ですネ…」

これからの身の振り方を再認識した私たちは学園長室をでた後、篠原先生に連れられて教室へと向かって行った。

私達の学年は二年生という設定になっており、教室は高等部校舎の三階にある。

ちなみに、中等部と高等部の校舎は四階建てになっており職員室などは一階に集中させてある。

各校舎は連絡通路で繋がっていて自由に行き来ができる。

「着いたわよ。ここが貴女達の教室なの」

篠原先生が自信満々に言ったが、私達はジト目で彼女を睨んだ。

学園長室を出た後散々迷った挙げ句、資料で覚えていた私達が道案内したのだ。

やっと教室に着いて篠原先生が中に入ろうとしたが、私は扉の上に何かがある事に気が付いた。

「先生ちよつとまー」

パコッ！。

先生が扉を開けた瞬間、上に仕掛けてあった黒板消しが落ちてきて

頭に直撃した。

「いったゝい！」

篠原先生が頭を押さえてうずくまる。

「えーと」

「…随分と古典的なトラップですね」

「ああ、ソレに引つ掛かる人間を俺は初めて見た」

「同意見です」

教室の中からは笑い声が聞こえてくる。

「もう！誰よこんなイタズラしたのは！」

すぐに復活した先生は教室に駆け込んでいった。

「やれやれ。生徒に遊ばれているぞ」

取りあえずそのまま入る訳にも行かないので暫く待つことにした。

「未央さん」

唐突に志保が話しかけてきた。

「わかつているとは思いますが、くれぐれも怪しまれないよう女の子として振る舞って下さいね」

「…努力しよう」

少し自信はないが、なるべく派手な言動はしないでおう。

「二人ともー、入って来て良いわよ」中から声が聞こえてきたので私達は入る事にした。

「えー、彼女達が今日転入してきた娘達です。それじゃ二人共、自己紹介してね」

そう促されて、予め考えておいた言葉を引き出した。

「皆さん初めまして。時雨未央と言います。これから宜しく願います」

その瞬間、クラスの男子達から喝采が上がった。なんだか分からないが、随分な歓迎振りだった。

「えーと、私は宮倉志保と言います。色々分からない事が多いので、皆さんに教えて貰えたら嬉しいですよ」

今度は女子も加わって大喝采が巻き起こった。

よく聴くと

「可愛いー！」とか、

「お人形さんみたいー！」などの歓声が上がっているようだ。

「おいおい……」

こちらの予想以上の反応に少し気圧されていると篠原先生が注意した。

「コラコラ、みんなで騒いだら先に進まないでしょうが！静かにしなさい！」

『はい』

そう言うとすぐに教室が静かになった。（……へえ、中々やるな）

伊達にその若さで教師なっていないようである。

「じゃあ気を取り直して、取りあえず貴女達はその窓側の席に座ってくれる？」

見るとちょうど後ろ側の席が二人分空いていたのでそこに座る事にした。

その後のHRは順調に進んだが、休み時間に入ると予想はしていたが案の定、質問攻めの嵐がやって来た。

「ねえねえ、どこの学校から来たの？」

一番乗りで質問して来たのは、大きめのメガネをした志保と同じシヨートカットの女の子だった。

「……えーっと、私達はアメリカの学校から来たの。ね、志保？」

「あ、うん。まあそんなに長く居なかったけどね」

素早くこちらに話を合わせてくれた事に少しだけ驚いたが、なる程……同行させるには色々都合がいい人材という訳か。

「へえ、という事は二人とも帰国子女って事なんだ。なんかカッコイー！」

「ど、どこら辺がカッコいいんだろ？」なんか知らんが、相当に独自の解釈を持っている娘らしい。

「ちよっと沙織。いきなり転校生にアンタの空想ワードを聴かせないでよね。時雨さんが困ってるじゃない」

沙織と呼ばれた娘の横から、肩にかかるぐらいのロングの髪の女の子が出てきた。

「えー？そんな事ないよ夏美」。みーちゃんもそう思うよね！」

「みーちゃん？」

誰の事を言っているのか分からないが、視線を追ってみると……私？

「未央だからみーちゃん！ね？いいでしょ？」

いきなりあだ名で呼ばれる事になるうとは思ひもなかった。

この沙織という娘は、どうやら思い込んだら一直線のタイプらしい。ふと横を見てみれば、志保の方も同じ様に女子に囲まれているのが分かる。

「あ、そうそう。まだ名前を言っていなかったね。私の名前は神野沙織^{あり}で、こっちは千野夏美^{ちのなつみ}。さっちゃんとなっちゃんてヨロシク！」

「よくない！勝手にヘンな呼び方しないでよ！」

「えー良いじゃん。みーちゃんもその方がいいよねー」

「いや、私も出来れば普通の方が……」

「うー」

むくれて見せるが、こっちらからすれば恥ずかしいいったらありやしない。

「ところで沙織。アンタ今日のレポートまだだったでしょ。いいのやらなくって？」

「え？ あーっ、忘れてた！夏美いっ手伝ってー！」

「……はいはい、分かったから抱きつかないで。じゃね時雨さん」

「あ、はい」

夏美は沙織を引きずって自分たちの机に戻っていく。

他の娘たちもそれに続いて離れていった。

とりあえずこれで少しは静かになったようだ。

暫くして一限目の開始を告げるチャイムの音が響き生徒たちは各々の机へと戻っていった。

「さて、私たちも戻ろうか？」

生徒たちからの質問責めから解放された私たちも自分たちの机に戻

った。しかし、こうして学校の授業を受けるのは何年振りだろうか？

午前中の授業が終わってクラス中から安堵の息が聞こえてくる。

「いやゝ参った。結構忘れていたものだな。やっぱ時の流れは怖いねゝ」

久々の授業というのは中々楽しかった。

何だか学生の頃に帰ったみたいだ。

てつ、今は学生だったか？

昼休みに入ると教室から生徒たちが各々の昼食を摂るためだろうか、慌ただしく動き始めた。特に男子たちの動きは凄まじく、殺気すら感じられた。

恐らくは学食の席取りか購買部のパン目当てなのだろう。

資料にも書かれていたが、この時間はその二ヶ所が戦場のようになると明記してある。

「うーむ、恐るべし」

その根性に少しだけ感心したが、後ろから志保が声をかけてきた。

「未央さん、私たちもとりのあえず昼食にしましょう」

「そうだな。メシ食ってサツサと仕事を始めるか」

「はい。ところで未央さん、お昼はどうするんですか？」

「どうするってー あ」

そう言えば弁当とか全然用意してなかった事をすっかり忘れてた。

「私は自分のを用意して来ましたけど、さすがに未央さんのまではちよつと」

確かに志保の前には自分用の弁当が置いてあるが、サイズがおかしい。

「それ、全部喰うのか？」

そこにあつたのは高さ20cm位のドカベンだった。

「そうですけど アゲマセンヨ」

そう言つてドカベンを抱え込んだ。

「いやゝ... いらなから」

その小柄な体のどこに入ると言うのだろうか…？

「私は学食で済ませるよ」

「そうですね、わかりました。ではまた後で」

「ああ、また後でな」

そう言っただけで私は教室を出ようとした。

「あつ、ちよつと良いですか？」

席を立つた所で一人の男子から声を掛けられた。

「はい？」

「もしかして、これからお昼ですか？」

「そうですね」

「なら良かった。僕も一緒にしてもいいかな？」

「ええ…まあ、良いですけど？」

「良かった」

話し掛けてきたのは少し小柄な大人しそうな男子生徒だった。

私達はとりあえず学食で昼食を摂ることとした。

ちなみにあの後、彼の友人であろう男子達も数人加わって随分と賑やかになった。

「あ、そうそう。自己紹介がまだでしたね。僕は佐々木達也ささきたつやで、右

から」

「吉田友也よしだともやだ。ヨロシク」

「あ、どうも」

そう言っただけで握手をしてきたのはブロンドの長髪をした男子だった。

ルックスは悪くないし、態度からしても嫌みに見えないから結構モテるタイプだろう。

まあ、この態度が演技によるものかもしれないが、そこは裏社会をみてきたこの俺には通じない。

100%本物だ、間違いない。

さて、今の二人は初対面なのだが　もう一人、一緒に付いて来た男子には見覚えがあった。

今の二人と違いあまり喋らないが、その眼光に威圧感を感じる。

「俺の名は八神出雲^{やがみいずも}。まあ、よろしく」

（間違いない　　アイツだ）

物静かな印象を受けるが、その立ち振る舞いが何かの武術を身に付けている事がわかる。

（そういえばリストの中にコイツの名前が載っていたな）

何故私がこの男を知っているかと言うと、二年くらい前に仕事で殺り合ったのだ。

その時の勝負は警察が乱入して来たのでお流れになったが、まさかこんな所で会おうとは思わなかった。

（まあ、正体がバレない限り危険はないか…）

「はい。よろしく」

とりあえずは怪しまれないよう普通に接しておこう。

一通り紹介も済んだ所で、昼食にした。

その後は質問混じりの談笑で何事も無く昼休みが過ぎていった。

「ちよつといいか？」

全員が食べ終わって教室に戻ろうかと言うときに、突然八神から呼び止められた。

「話がある」そのまま有無を言わず私の腕を取って学食から連れ出した。

「お、おい出雲？」

吉田が慌てて止めようとしたが、八神はそれを片手で制した。

「大丈夫だ。先に戻っていてくれ」

「…あ、ああ。判った　？」

訳が分からない様子だったが、とりあえず佐々木を連れて教室へと戻っていった。

さて、腕を掴まれて学食を出た私は校舎の裏手にある古びた物置小屋まで来ていた。

「ここなら人目は無いだろう」あたりを見渡して人影が無いことを確認する。

「久し振りだな。こそ泥野郎」

私に顔を近づけていきなりこう言ってきた。

まさかとは思ったが、やっぱりバレてたか…。

「よう。また会ったな、武術バカ」

「こんな所で何をしている？」

「ちよつと待て。その前にどうして俺だと気付いた？」

そう、そこが不自然なのだ。今の私は女に女装してるわけでは無く、女に変身しているのだ。

人相や声まで変わっているこの状態で、男だった二年前の姿から判る筈がない。

「そんなのは簡単だ。お前の動作にその眼光、そして気配だ。まあ、俺は真っ先にその気配で気付いたがな。後の二つは確定要因だ」

「……あつそう」

コイツは人を気配で判別しているのか？器用な奴がいたものだ。

とりあえず感心はした私だが、もうじき昼休みも終わるのでサッサと話を進める事にした。

コイツとの昔話はまた今度にしよう。

「私は仕事でこの学園に来ているんだ。ホレ」

私は八神に学園長に見せた手紙を渡した。

「この印は紫竜会の…そうか、連絡は来ている。しかし、俺はてっきりまた盗みに来たのかと思ったぞ」

「そっちの方面は休業中」

「だろうな。あれ以来お前の噂は聞かなくなったからな」
そりゃそうだろう。

何せあの時の死闘で体中がボロボロになったのだ。
完全復帰まで半年はかかった。

「まあ、それでも今起きている下着泥棒の犯人ってことは無いだろうからな」

「当たり前だ。誰がんなケチ臭い盗みをするか　　って下着泥棒？」

「ああ。ここ最近女子寮で頻繁に起こっているらしい。別にお前の仕事と無関係かも知らんが、一応気をつけるよ」

「…はいはい、気をつけるよ。まあ、要らん心配だろうがな」

どこの世界に自分の下着の盗まれる盗賊がいると言うんだ？あ、元か。

だが、結構近くにそんなマヌケが居た事に後で気が付くことになるとは、この時は考えもなかった。

ちようど良いタイミングで予鈴が鳴ったので私達はそのまま戻る事にした。

八神とは別のクラスだったので廊下で別れた。

「あ、未央ちゃんおかえりー」

教室に入ると夏美や沙織達が私の机を中心に何やら話し込んでる。その中に志保の姿もあった。

「みんな、私の机で何してるの？」

「何って未央ちゃんを待ってたんだよ。ちょっと相談したい事があったの」

「相談？」

二人の顔をみると少し神妙な表情をしている。

「未央さん。どうやらここ最近、女子寮で下着泥棒が現れるらしいですよ？」

二人の代わりに志保が答えた。

「ああ、その事か。それならさっき聞いたよ」

「え?!どこで聞いたの？」

「どこって、別のクラスの男子から注意された」

素早く反応した夏美だが、そんなに男子生徒が知っている事が衝撃だったか？

「ねえ未央ちゃん、その男子って…もしかして白羽くん？」

「誰ソレ？私が聞いたのは八神って人からだけど」

「ああ、八神くんからか。なら良かった」

「で、その白羽って人は誰？」

もしかして夏美の彼氏だったりなんて事は　。

「あゝアレは只の女好き。どーゆう訳か女子の情報に詳しいんだよね」

無かったか。

「あのゝ」

不意に背後から声が聞こえてきた。

振り向いてみると篠原先生が涙目でこっちを睨んでいた。

「…もう授業始まつてるんですけど。いい加減、席に戻ってくれませんか？」

『　はい』

「　　ふゝ終わった、終わった」

「お疲れ様です」

午後の授業も無事に終わり私達は学園の女子寮へと向かっていった。沙織と夏美に歓迎会の誘いを受けたが、先に届いている荷物の片付けをすると言って別れたのだ。

あの二人も寮住まいと言うからすぐに会えるだろう。

「しかし、奇妙なもんだな」

「何がです？」

「今は二人揃って女になってるから違和感ないが、普通は入れんぞ女子寮なんか」「ああ、確かにそうですね」

「男二人、禁断の花園へご招待ってか？」

「あははは。僕たちは今は女の子ですから、その言い方はどうかと」

「そりゃそうだ」

と、ここで私は足を止めた。

「さて、「冗談はここまでして本題に移ろう」

周りに人影が無いことを確認すると、志保を連れて近くの木陰に入り込んだ。

夕暮れが近いせいか上手い具合に身を隠す事ができた。

「志保：いや朝霧。俺はこの依頼について、昨日渡された資料で大体理解しているつもりだ。だが、あの資料には肝心な情報が抜けていた。」

「それが何かは知っているな？」

俺はここに潜入してからずっとある疑問を持っていた。

それが解けなければ仕事にならないモノだった。

「惨利火李の事ですね」

「そうだ」

資料のどこを見ても惨利に関する情報が無い。

これでは捕獲するどころか発見する事すら難しい。

「すみません。惨利の情報に関しては記載する事が出来なかったんです」

「どういう事だ？」

「アイツは変装の達人なんです。オマケに紫竜会にいる時も正体を隠していたらしいんです」

紫竜会の奴らにも正体を明かさないとはい体何者だ？

「で？何でそんなのをお前は判別出来るんだ？」

「気配　とでも言いましょうか？半年前のあの時もそんな感じで奴の正体が分かったみたいです」

「随分とアバウトだな」

「まあ、そんな訳で資料に記載出来なかったんです」
「なる程」

こりゃ惨利を発見するのは相当苦労しそうだな。

それに、最悪職員どころか生徒の中に紛れ込んでいる可能性がある。
「仕方がない…地道に捜すしか無いか。じゃあサッサと寮に行って荷物を片付けるとするか」

そうと分かればここでの詮索は意味がない。

「そうですね、そうと決まれば早く行きましょう」

二人で同時に立ち上がるともう一度周りを見渡して木陰から出た。
しばらく道なりに歩いて行くと、目の前に大きな建物が2つ見えて

きた。

向かって右側が女子寮の桜咲寮^{おうさく}で、反対側が男子寮の鈴鳴寮^{りんめい}となっている。私達は桜咲寮の管理人室に行くと、自分たちの部屋の鍵と見取り図を受け取った。

本来なら寮長の役目なのだが、どうやら留守のようなので変わりに管理人さんが代行したらしい。

管理人は、二十代後半らしい落ち着いた感じの女性だった。スタイルも良く、艶やかな黒の長髪がよく似合う。

(…と、見取れてる場合じゃなかった)

部屋番号を見ると、個人部屋で志保とは隣室になっていた。

「よし、じゃあ行くか」

部屋に着くと私達は荷物の整理の為一旦別れた。

部屋の中には大きめの段ボールが2・3個と自分のアタッシューケースが置いてあった。

中身は教材に衣服類と……。

「何だこりゃ？」

どこかで見たよーな物が沢山積まれていた。

ファンデーション…アイカラー…口紅…他諸々の化粧品がぎっしり揃っていた。

しかもご丁寧に説明書付きで。

「……何を考えてるんだよ」

俺に化粧しろって事なのだろうか？

壁に取り付けられている姿鏡を見た。

確かにハタから見ても器量は悪くない。

さぞかし化粧すれば化けるだろう。

「……てっ、違う違う！　コレは別に閉まって置こう」

化粧品一式を部屋の隅に避けておき、その他の物を順に締まっく。

「　　そう言えば下着泥棒がいるんだっけ？」

私は備え付けのタンスに必要な分だけしまつと、残りを別の場所へ

移した。

「これで良いな」

部屋には無断で入られないよう細工をしておくが、多少デコイを置いておけば対した被害は無くなる。

「ま、こんなもんか」

暫くして大体の片付けが終了すると、ノックの音が聞こえてきた。

「はい」戸を開けると志保が待っていた。

その後ろには沙織や夏美の姿も見える。

「ヤッホー」

「こんばんは」

寮内のせいいか、二人とも制服を脱いでラフな私服に着替えている。

「二人共どうしたの？」

「いやゝ実は私達も同じ階に部屋があつてね」

「詩織じゃ無いけど、ちよつとした親睦会みたいな事をやるうかつて話になったの」

「ちよつと夏美ゝ！。私みたいってどういう事よ！？」

「さあねゝ？」

「ぶゝ」

素早くツツコミを詩織を夏美が軽く流す。

この娘たちはもしかして毎日こんなやり取りをしているのだろうか？

「で、未央さんは片付け終わりましたか？」

「ん？まあ、大体の所は終わつたかな。志保の方も終わつたみたいだな」

「はい。じゃあ早速ですけどお部屋をお借りしますね」

「はあ？」

「えつとね、未央ちゃんの部屋って周りの部屋と違って少し広くなつてるの。だからこゝゆう時に使うには最適ってわけ」

「……なる程ね」

いきなり部屋を貸せと言ってきたのは驚いたが、なにも怪しい物を置いてあるわけじゃないし問題無いだろう。

「そういう事なら別にいいよ。さ、入って入って」

私は部屋に招き入れようとすると詩織が呼び止めた。

「ちよつと待つて。おーい大丈夫だつてさー!」

詩織が廊下の方に向かって叫んでるのを見て、私も覗いてみた。

「をい…」

見るとあと数人こつちを見て手を振っている。

しかも、それぞれに小さな袋をぶら下げているが、飛び出している形状から察するにお菓子や飲料品では無かるうか？

「……宴会でもする気か？キミたちは」

「まあまあ、気にしない気にしない♪」

ああ…私いや俺は今この瞬間、この仕事を引き受けた事を少しだけ後悔し始めた。

異常なまでに用意周到な紫竜会の対応。

朝霧天馬による惨李火利の搜索方法。

なによりも初対面だからと言ってお祭りモード全開で接してくるクラスメートの面々。

ハッキリとは言えないが、これから先俺が仕事とは無関係なトラブルに巻き込まれて行く。

そんな気がしてきた。

俺は自分の部屋で行われている宴会を見ながらふと、そう思った。

信じたくは無いが、所謂 女のカン というシロモノを感じながら俺の、 時雨未央 としての学園生活の初日が過ぎていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2252c/>

すりリングGIRL？

2010年10月9日02時14分発行